

ルザヤ先生 フローラ先生

アヌ先生



インド報告

2007年
9月6日(木)～12日(水)

西村ゆり

奥村さゆり、村上祥子、片山治子(大学3年生)
福井保孝、西村ゆり



9月6日(木)



7:15、MK シャトルタクシーお迎え。福井さんと途中から一緒になり、9:45 関西国際空港着。学生さん3人と合流。旅行社の K さんが見送りに来てくださった。この事業の趣旨を理解し、料金のことも含めて、とっても親身にアレンジしてくださった。信頼できる旅行社を得たことは事業の今後のためにも本当に嬉しいことだ。

(次回は是非インドに同行して下さいね) ハルモニウムアコーディオンを卓上で弾けるような形にした楽器—を持っていくため、機内に預ける荷物の制限重量(5人で100kg)をオーバーしないか心配だったが、あっさりOK。「こんなことなら、もっとプレゼント用のカバン(去年、ある企業からどっさりいただいたもの)を持ってくればよかったね」と話しながら、TG623機に搭乗。とにかく無事、12日に学生3人をここまで連れて帰らなければ・・・。

お久しぶりのムンバイ

11:45に開空を離陸した飛行機は、5時間半後タイ・バンコク着。18:45、乗り換え便のTG317機、バンコク発。予定通り(珍しい?)21:30ムンバイ着。荷物の受け取り、ドルからルビーの両替に、いつものように時間がかかり、ムンバイ空港を出たのは23:00前だった。

モンスーンの終りの季節で、ひょっとしたら大雨かもしれないと思っていたが、(去年、同じ時期に来たけど、記録的な降雨量だった)ムンバイは乾いていた。夜遅いというのに、例の如く人が多く、女子大生3人びっくりしている。福井さんが、「町中に出たらもっとびっくりしますよ」と脅かす。BLPのいつものドライバーさんが、すぐ私たちを見つけてくれてホッとした。これで無事ホテルにチェックインできれば、(これが問題なのだ。予約したはずなのに「部屋はないよ」と何回言われたことか・・・)この旅の第一関門は突破である。

5人分の荷物を積んだ車は超満員状態。お尻を半分浮かせた格好で1時間、クラクションの音もけたたましいムンバイの町を走り、ホテル・サヒール着。難なくチェックイン。こじんまりしたきれいなホテル。出発前ぎりぎりまでドタバタしていたため、初日の関門が通過できたことで、一気に疲れが出てしまった。何もかも放り出してベッドに直行したかったが、明日は朝から光の教室(モンスーンクラス)に行く予定なので、洗濯、シャワー、荷物の整理、おみやげの準備を無理矢理済ませ、「7時に起こして」とフロントに電話して、ようやく一息。(洗面所では、あまりありがたくない生き物の歓迎を受けた—後述—)飛行機で読み始めた本「バガヴァット・ギーター*の世界」(上村勝彦・著)が面白くてつい読んでしまい、2:00やっと就寝。<*ヒンドゥー教の聖典「マハー・バーラタ」中の一節。人間の姿になったクリシュナ神が、勇者アルジュナに長々と人の道を説く部分。ガンジーの座右の書でもあった>

9月7日(金)

ツーリストでしかないというのに・・・

夜中3回目が覚め、結局5:30に起きてしまった。アザーン(イスラム教の礼拝の声)を聞きながら、昨夜ホテルへの道中、BLPの車の窓にすがりついてきた小さな二人の女の子のことを思い出す。

夜中の12時近い時間に、あの子達は物乞いをしていた。改めてインドに来たことを実感。毎回お金をあげるかどうか悩んでいるうちに通り過ぎてしまう自分の優柔不断さにちょっとへこむ。気分転換に早朝の散歩。ホテル周辺の床屋さん大繁盛である。(仕事の前に、ひげを剃ってさっぱりする人が多いのだ) 店を開ける前に、道端の木に手を当てて祈っているおばあさんもいる。インドの普通の人たちの、普通の朝の風景。私は外国人の観光客でしかないというのに、今回、なんだか大げさな目的を掲げてここに来てしまった。

この旅の目的は、JICA(国際協力機構)事業の内容について、BLPの感触を確かめることである。大それたことに、私たちは3年前から、このインド事業をJICAの「草の根技術協力事業」に結びつけることを考えていた。何度も挫折し、一時は無理かとあきらめかけていたのが、去年末ごろから、外と内、双方の状況が変わり、一気に進み始めた。思い切ってやってみる気になったのは、子ども達が、光の教室を卒業した後の現実を知ったことが大きかった。(教室を出たあと、ほとんどの子どもは、“放浪者”になってしまうというのだ)「子ども達の卒業後の自立を支援するチャンスであるなら、できる限りやってみよう」という思いで、運営委員会で長時間かけて話し合い、ひねり出した計画は、まず子どもの「心の自立」のため音楽療法を行うという、JICA事業としてはかなり変わった?内容のもの。心の自立の延長上に、「生活の自立」がもたらされる状況を作る—そんな気宇壮大(無謀?)な光の音符の事業提案書(これは、今後JICAと相談を重ねながら改良されていく)が、現在、JICAの様々なセクションで精査されており、私達は、感想を付されてそれが戻ってくるのを待っている。

「心の自立」のための音楽って何だ?—実現は無理そうだな、と感じつつも、「何とかなる」と突き進んでいたら、これ以上望めないような専門家(指導者)がメンバーの中に見つかり、あれよあれよと話しが進んで、気がついたら、事業提案書の内容だけが、えらく具体的になっていた。日本でどんなに具体的な案を作っても、BLPの本心はどうなんだ?インドの現実にも即しているのだろうか?今回、めぐむさんという英語の達人もいないし、どうやってBLPと相談していいのかわからない、正直、よく分かっていない。改めて「えらいことになったなあ」と思う。(頼みの綱は福井さんだ。彼が今回一緒に来てくれたことは心強い) そのうちに朝食の時間になり、インド1日目は、否応なく動き出す。

子ども達とのコンサート ~健康診断、ダンス、なんでもあり~

9:30過ぎ、BLPの車が迎えに来てくれてモンsoonクラス(光の教室)へ。今度のホテルはアクウォース病院にかなり近い。さゆりさん、祥子さん、治子さんの女子大生3人組、ごく自然に状況に溶け込んでいるように見えるので、安心してちょっと放ったらかし。(ごめんね~) やっぱモンsoonはまだ明け切っていないようで、道中、かなり強い雨が降り出した。

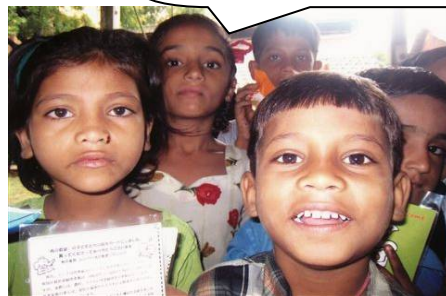
クラスに着くや否や、大勢の子ども達が、大声で「ゆり!」と叫びながら飛びついてきた。これだけ通ってくれば、覚えてくれるものなのね。ああ本当に可愛い!と、大雨の中、気分は快晴に。

今日は外のホールで授業の様子。あいさつもそこそこに、すぐに子ども達とのコンサートが始まった。(シスター・セラフィンは、今回遠方まで出掛けておられて不在。滞在中2回、電話でたっぷりお話しはできたけれど、お会いできなかった) 去年12月の訪問時に、子ども達に教えてもらったインドの“遊び歌”? (何かの詩—意味は、もちろん全然分からない—を、メロディーもなく1拍子でわめくだけのもの) を一緒に歌う(わめく)。

子ども達全員が歌える歌なので、一気に盛り上がる。出発前、カタカナで詩を書いて学生さん達にも渡していたので全員で大合唱。ハルモニウム、ロールピアノ、体操服、カバン、リコーダーの楽譜を寄贈したあと、一人一人の子ども達の名前を呼んで、(これも去年、一人ずつ書いて、カタカナでメモした紙が役立った)日本から持ってきたポストカードを、学生さん達から手渡す。

新しく来た子、去年いなかった子には、改めて名前をきいて渡した。名前はやっぱり大事だと実感。自分の名前を正確に覚えてもらおうと、子ども達は、私のノート

ポストカード(子どもたちの絵から作ったもの)第2弾をもらって…



を奪い合うようにして名前を書いてくれた。(中にはぐるぐるの“線”だけの子どもも…) とっても覚えにくいけれど、何とか全員の名前を覚えたいと思う。11:30頃、Dr.パイとカマートさんが教室に到着。二人の若いインド女性を同行されており、医学部の研修生と紹介された。日本の若い学生と一緒に「ぞうさん」のせっせっせと歌。これまで、ここで何度もやってきた遊びなので、子どもたち全員がよく知っており、大騒ぎで楽しむ。折り紙も大喜び。学生3人も、子どもたちに引張りだこで、訳の分からないまま、言葉も通じないまま、何の違和感もなく、子ども達の“ディーディー”(お姉さん)になりきっていた。

この大騒ぎの合間に、さっき紹介された研修生さん二人は、淡々と自分の仕事を始めていた。あとでDr.パイから説明があったが、教室の子どもの健康診断は、今、ムンバイの医科大学の学生の“研修”として、交代で1ヶ月に1回行われているとか。「ハンセン病の勉強にもなる」なるほど…。BLPは、ヒューマンリレーション(人のつながり)を作ること、ネットワークを張りめぐらせて、どんどん新しい人材を育てていくことに長けている、と改めて感心した。子どもたちは、器用に交代で健康診断を受けつつ、ダンスを披露してくれる。みんな舞台上上がることがうれしくてたまらない様子。



幼い弟を、体の大きな少年が、父親のようにゆったりと、優しくあやしながら、舞台上で一緒に踊らせている。(本当に親子かと思った)年長と年少の子ども同士が、強くつながっており、音にあわせて踊ることが大好きで、大きな声で歌うことも大好き、という彼らを見ていると、ここでの音楽指導の可能性に期待が持てる気がした。要は“やり方”だろう。このままで、この子達の表現したい、という衝動を、もう一步深め、ひとつの表現にまとめていけるのなら、JICA事業は可能かもしれない。

ここの“助教員”のようなチャンゲーが、「教室にいっぱい作品を飾ったから見に来て」と呼びに来る。さっそく教室に入り、子ども達の作品を見た祥子さん、さゆりさん、治子さんが、「かわいい!」と叫ぶ。色も形も派手だけど、日本人から見ると作りが雑(?)だし、どうかなあ、と思っていたビーズやスポンジの手芸作品。今の女子大生の目には「かわいい!」と映るのか。日本人の好みに合わせて“売る”ことばかり考えていた自分が恥ずかしくなった。このままの状態、この素朴な魅力をたくさんの人に伝えることが出来たらいいな。でも、きっとそれはとても難しいことだろうな。



Dr.パイから教室の拡張について報告を受ける。今の教室を、隣の空き小屋とつなげてくれるように、アクウォース病院に頼んでいるが、なかなか難しいとのこと。雨漏りもひどいそうだ。

12:15、やっと教室訪問終了。「明日は土曜日でお休みだけど、小さい子は来るから、君らも来たらいいよ」とカマートさん。でもアヌ先生は「来ないでね」。2時間半もかけてここまで通っている彼女にしたなら、せっかくの休日をつぶされることになるのだ。「本当に申し訳ありません。でも来たいんです。」と無理を言ってしまった。

パイさん、カマートさんも一緒に車に乗り、「ジェイジェイホスピタル」というところで降りられた。ムンバイには、国立、私立あわせていくつもの医科大学があり、その付属病院もある。ここはそのひとつ。BLPはジェイジェイホスピタル皮膚科に、サテライトの診療所を設け、パイさんが定期的に通っているそうだ。サテライトの診療所はこの他にいくつもあって、農村にも定期的に通って治療しているんだから、ものすごいパワーだと思う。

スーパーマーケットって、必要なの?

13:00、ホテルに帰る。はあ楽しかった。みなさんお疲れ様。少し休んで、14:00、5人でホテルの向かいのデラックスなスーパーマーケット「ボンバイセンター」へ。ここが、かの「スラムにスーパーが?!」の場所。スーパーというより高級デパートで、入り口の荷物チェックがとても厳しい。中は吹き抜けで、日本でもあまりお目にかかれないような、ハイセンスなブランドショップが並んでいる。お昼もまだだし、食べる場所は…?と探すが、1階のチキン料理のお店のみ。とても高いのでパス。一番上の階にフードマーケットがあるというので、お腹を空かせた5人、いそいそとエレベーターで最上階に移動する。ありとあらゆる食材や、洗剤等の家庭用品が並んだ巨大な売り場で、さっそく買い物。頼まれていた紅茶や石けん、クミン、ジューラー(どちらもスパイス)を買い、インド人が何を買いしているかリサーチする。ものすごく大きくて重いカート(日本の物の3倍はありそう)に、びっくりするほど沢山の菓子を入れている。インドはえらいことになっているのでは…。

買い物のあと町へ。レストランを見つけて食事。(15:00過ぎ)
女子大生3人、初めてターリー(定食)を食べ、その辛さと甘さに驚いていた。ホテルに戻り、しばし休憩。テレビ三昧。

遅い昼食だったので、20:00に一応ホテルのレストランに再集合したが、「お茶だけ」のつもりだった。でも、結局食事。けっこうおいしい。私はサンドイッチ半分。



眠くてたまらないが、明日 BLP とディナーの席で色々話をする予定なので、インドの現状のことも、光の音符のインド事業についても、前もってきちんと伝えておかないといけない。BLP のオフィス訪問もすることになるだろうし、何も知らなければ彼女たちにとって、わけの分からない辛い時間になる。寝ぼけ頭の、ろれつの回らない口での説明だったが、3人とも一生懸命聞いてくれた。

「子どものことどう感じた?」と聞くと、「可愛い!」ハンセン病や障害など全く感じず、「普通」だったとのこと。日本のように健常児と障害児を分けず、みんな一緒に仲良しなので、「でっかい家族」のようだったと言う。「音楽についてはどう感じた?あの子たちの音楽ってどういうものだと思う?」という質問には、「音楽が大好きで、楽しんでいた」との答え。「恥ずかしがって下を向いていても、舞台上って注目されるのがうれしそうだった。」

あの子たちの「表現したい」という思いは熱い。話は自然に日本の子どものことに…。貧困、病気という状況にあっても、インドの子どもは今の日本の子どもより幸せそうに見えるのは事実である。私たちが光の教室の子どもから学ぶことはたくさんある。「明日子どもにダンスを教えてもらおう!」ナイスアイデア! 祥子さんが、「日本の子どもを、ここに連れてこれたらいいなあ」と言う。彼女たちのような若い大学生のボランティアと一緒に、日本の子どもたちを、毎年ここに連れて来られるようなシステムが作れたらそれは素敵だ。どんなことでも「無理だ」と始めから投げてはいけない。いつかそれが出来る時期が来ると思っていよう。疲れ切っていたが、若い人に力づけられた思いで部屋に戻る。

そして… 私はひどい目にあったのだった。

ミスター・コックローチ (ゴキブリ)

バスルームにいらしたお客様は、インドのゴキブリさんだった。これは3匹目なのだ。初日、やれやれ…と、長旅の疲れをシャワーで洗い流そうとバスルームに入った私は、触角の長い、いやに色白の(薄い茶色)でっかいゴキさんにびっくりした。そいつは、私の求めに応じてやってきたホテルのスタッフによって即刻退治された。そして、今朝、2匹目は、私の洗面用具入れの中にいらっしまった。そーっと中のものを全部出してトイレの上で袋を逆さにし、一気に水に流す。そして、そして、こいつである。もうイヤ!と、廊下にいたスタッフを呼んだら、そのスタッフは、ゴキブリ以下だった。私が脅えているとでも思ったのか(怒ってたんです)、とつてもはしゃいでゴキを叩き、ゴミ箱に入れて「ほれ、ちゃんと入ってるぞ」と近くに持ってくる。「怖くないよ、大丈夫、大丈夫」とか言いながら抱きついてくるので突き飛ばす。「何を誤解してるの。ぼくマダムのことママみたいに好ましく思ってるんだよ〜」(悪いけどあんたのような息子はいません)「アホ!」と部屋の外に

押し出してホッとしていたら、しばらくして又ピンポンとチャイム。うっかりドアを開けて、また彼がいたのでギョッとする。「あのゴキブリ、ホテルのマネージャーに見せなきゃ」と言うので、ゴミ箱ごと突き出す。ゴキは息を吹き返し、箱の中で、外に出ようとあがいていた。「ほれ、下手くそ。まだ生きてるよ。」彼はこわごわ(彼も怖いんだ)ゴキを紙で包んで、なごりおしそうに去っていった。(戻ってこなくていいからね!) 笑っていいのか怒るべきなのか、疲れて何が何だか分からない。むしゃくしゃしてテレビをつけたら、素人のど自慢のような番組。あのゴキ男にそっくりなインド人男性が、腰をくねらせて踊りながら、調子よく歌っていた。

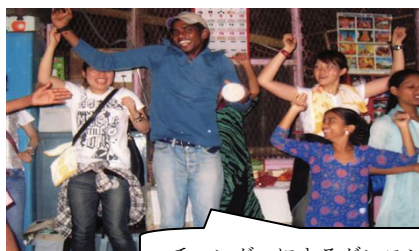
9月8日(土)

ダンスの特訓を受ける

9:30にBLPの車でホテルを出て教室へ。ホリデーなのに子どもたち、たくさん来ている。車が着くなりみんな大喜びで迎えてくれた。アヌ先生少し遅れて来られ「遠いところ、本当にごめんなさい。感謝しています」と謝る。

昨夜夕食の席で話したとおり、子どもたちに「ダンス教えて」と頼んだら、すごくハードな、激しいダンスを延々と教えてくれた。私はすぐパス。女子大生3人フラフラの汗だく。50分近く、やたらと振りの細かいエクササイズが続き、最後はチャングーの長く厳しい指導。どんなに動いても、息ひとつ切らしていない。この子たち、体は小さいが鍛えられ方は半端じゃない。大騒ぎで狭い教室中、ひしめき合って踊る。チャングーは今日18歳になったそう。子どもたちの彼への人望は厚い。彼は、ここのリーダーだ。夜学にも通って勉強していると聞いて嬉しくなる。そうよチャングー! もっと勉強して、もう少しこの小さい子たちの世話をしな。英語もかなりしっかりと話す、優しくたくましい彼は、JICA事業でのリーダーになる素質充分である。彼に賭けたいと思う。

アヌ先生のことを知りたいと思い、改めて色々質問。Mrs.パイ (パイ先生の奥さんではない。同姓のBLPスタッフ。31年間、BLPでボランティアのマネージメントを続けている方)が、英語に訳して下さった。



チャングーによるダンスレッスン

アヌ先生は子どもの“お母さん”のような存在である。ここに来て3年。それまでは、老人施設で看護師の助手として、患者の細かい要求に応える仕事をされていた。

光の教室では、現在、英語・ヒンディー語・マラーティー語・算数などを教えているが、公立学校の授業の補習が主であり、それぞれの子どもの分からないところを、必要に応じて何でも教えている。「でもね、まず大切なのは“しつけ”なの」とアヌ先生は言う。社会で何をやって良いか、何をやってはいけないのか、厳しく教えるのだ。スラムに住む子どもたちは、両親からそんな基本的なことを教えられないまま育っているのだから、まさしくアヌ先生は“お母さん”なのだ。

どんなに騒いでいても、アヌ先生の「静かに!」の一言でピタリと黙る子ども達。厳しくて優しい、そしてとても強い女性だと感じた。片道2時間半、毎日通うだけでも大変だろう。



教室の子どもの元気は底なし。「ゆーり! ゆーり!」の大合唱。両手と両肩に沢山の子どもがぶら下がり、私もアヌ先生には全く及ばないけれど、50人の子持ちになった気分。

いたずら者で調子のよいソーイェルという男の子が、特にべったりくっついていて、(彼も又このキーパーソンである) 私に、エノコロ草に似た雑草をプレゼントしてくれた。

ソーイェル

片時もじっとしていない超元気な男の子

BLPのオフィスを訪問

12:30頃教室を出てカマートさん、Mrs.パイとレストランで昼食。とてもおいしく、女子大生喜ぶ。そのあとBLPのオフィスへ。新しいドクターを紹介され、おそらく前にいらしたラオ先生が作った

(と思われる)BLP のアピールの DVD を見ながら、そのドクターによる丁寧な説明。私の英語じゃ、とつても全部訳し切れない。「事実を曲げたら、ほんとにごめんね」と汗をかきながらの通訳。すぐに Dr.パイも来られ、農村での医療活動の説明。患者一人のために、周囲に家一軒ないような、辺鄙なところにも BLP スタッフは乗りこんでいく。具体的な患者の分布図(マッピング)は迫力があり、祥子さん、身を乗り出して真剣に質問。所々事実を折り曲げたと思うが、BLP のすごさだけは学生さん達にも伝わったみたい。



薬と、BLP が開発した
様々なリハビリ用具

ガナパティ所長も遅れて来られ、今度は JICA のことで質問責めにされて汗をかく。どう話せばいいのか、もう少し考えさせて！「夜のディナーの席で詳しく話します」と逃げた。さあどうする?!「まだ具体的なことは話さないで、感触だけ確かめてきて」とめぐむさんに言われているが、ガナパティさんは具体的に聞きたい様子。困ったな…。

16:30 頃やっとな BLP オフィスを出て、17:30 ホテルに戻る。ディナーのお迎えは 18:30 とのこと。部屋に入って笑ってしまった。ゴキ男さん(ごめんなさい)が、「よく謝っとけ」と、マネージャーに進言したのか、フルーツを盛ったバスケットと、クッキーを並べたお皿に「心よりのごあいさつをこめて」というメッセージが添えられ、机の上に置かれていた。一体何のごあいさつなのよ?

ディナー

18:30、BLP の車でダーダール駅近くのホテル・プリタムへ。新館のロビーで待っていたら、Dr.パイが「隣の旧館で待っていたよ」と呼びにこられた。ここは、めぐむさんとも何度か来たところである。ディナーはこちらの招待なので、お財布の中身を確認する。うーん、ちょっと不安…かな。

ガナパティさん、パイさん、ワインやらビールやらお食事、デザートまで、どんどん全員の分の注文をして下さる。とてもおいしく和やかで、気持ちの良い時間。(お金の心配さえなければ…)

慣れないワインで酔っぱらわないうちにと、改めて JICA 事業の趣旨を説明する。

7 月末、実はかなり詳しく、事業の目的や内容、そこで BLP に果たしていただきたい役割などを、めぐむさんの正確な英語で BLP にメールで送っていた。念のためプリントアウトして持ってきた、そのメールが役に立つ。お二人とも初めて聞くという顔で(読んでなかったんですか?)頷きながら、じっくり聞かれた。(私はメールを読み上げただけ)「細かいことは、まだ全く未知数で分かりません。2 月に、スペシャリスト(音楽療法士)と、めぐむと一緒にまた来るので、具体的なことは、その時に話し合いたい。BLP には、技術移転できる人材をスタッフの中から探してほしいと願っています」ゆっくり、出来るだけ正確にそう伝えた。「印日協会にも頼んでみよう」とガナパティさん。わお! ムンバイの印日協会はとても大きなしっかりした親日家のインド人(みんな大金持ち?)の組織だから、趣旨に賛同してくれる協働者もいるかもしれない。この瞬時のネットワークが BLP なのだ。

「子どもの数は今の倍にすればいいんだね。」パイさんがあっさり言われる。教室を広げることが大前提なんです。(難しいって言うたでしょう?) 昼間、BLP のオフィスで少しだけ JICA の話をした時、将来の大目標としての「識字・情操教育と医療の総合センターをスラムにつくる」という案について、パイさんは言われた。「大きなセンターをひとつ作るよりサテライトのセンターを 10ヶ所作るほうがはるかに有効なんだよ。」広大なスラムを見ても、BLP の、機動力を駆使した広範な活動を見ても、そのとおりだと思った。やっぱり日本でだけ考えてはいけな、とつくづく感じた。パイさんの「100 人説」も、それなりの考えあつての発言なのだろう。(帰国後、めぐむさんにこの話をしたら、「そんなもん、2 部制にしてでもどうしてでも、あの人たちすぐ 100 人を実現しちゃうよ」と当然のように言っていた)「教育はとつても時間がかかるものだと思うので、長く続けることを一番願っています。JICA 事業は更にヒューマンリレーションを広げるチャンスでもあるし、やり遂げれば実績にもなり、継続の可能性が拡大します。」と、一生懸命話す。実際、提案書を仕上げることさえ、いつになるのかも分からないし、仕上がっても採用されるかどうか、とても厳しい。日本で決まっても、インド政府が承認してくれるかどうか、その返事がいつなのかも分からない。それでも、子どもの自立のためのチャンスであることには違いない。

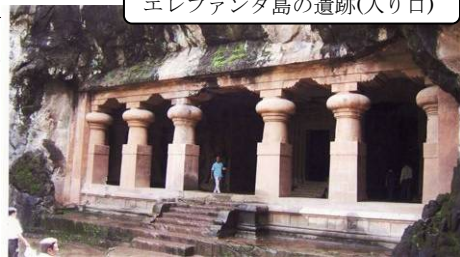
「結果を考えず、今成すべきことに専念しろ」という「ギター」(ここでずっと読んでいる本)の言葉が頭の中でぐるぐる…。「よく分かった。2 月にしっかり話そう。」これはきっと気持ちだけは分

タージマハールホテル



ナー代も 5300 ルピーも本当にありがとうご

エレファンタ島の遺跡(入り口)



9月9日(日)

観光とお買い物の一日

9:00 にホテルを出てインド門へ。エレファンタ島に渡る。途中、海の上でボロ船がエンジントラブル。じーっと待つこと 15 分。島では、インド人の抜け目なさ、猿の凶暴さにびっくり。歴史遺産より、人や動物のほうが面白い、というのもちょっと情けないような…。約 2 時間後、船でインド門に戻り、タージホテルの「トイレ」を体験する。政府直営のお店での買い物のあと、マクドナルドで遅い昼食。その後はひたすらお買い物。学生さんたちのためサリーを値切る。女子大生 3 人、“値切る”ことに燃え始め、かなり上達する。

9月10日(月)

ドラえもん?



ネコ3匹!

いつもの時間に教室。今日はワイワイガヤガヤ何をしようにも子どもが動きすぎ、わめきすぎていて始めから混乱。日本から持ってきたネコの耳をさゆりさん、治子さんが頭につけて、エーク・ビリー(ネコ 1 匹め)、ドー・ビリー(ネコ 2 匹め)と現れると、子どもたちびっくり。昨日の晩、私の部屋で、5 人で折った新聞紙の帽子を一人一人に配る。50 匹近いネコの集団。そこにドラえもんの着ぐるみを着た祥子さん登場。ぴたりと静まり返る教室。大きな目、目、目…。「暑いでしょう」とアヌ先生が心配そうに言う。汗びっしょりで祥子ドラえもんはケン玉に挑戦するが、なかなかうまくいかない。

「初日に、子ども達がゆっくりした簡単そうなダンスをやってたからあれを習おう」と、昨夜相談した。だが、どのダンスか、うまく伝えられない。結局 8 日と同じハードなエクササイズ。これは祥子さん危ない、とハラハラする。キーボードやハルモニウム、マンドリンも、こっちが弾いている横から、小さい手が何本も伸びてきて、結局むちゃくちゃに。う～どうしようかな…。



エーク・ビリー!

(ネコ 1 匹め)

ドー・ビリー!

(ネコ 2 匹め)



ノートにひらがなで“ゆり”と書いて見せ、「日本語の勉強だよ～」と呼びかける。フローラ先生、アヌ先生に黒板を使えと言われ、請われるまま、子どもの名前をひらがなで縦書きしていく。先生たち、必死でノートに写している。私たちの目に、デーヴァナガリー文字(ヒンディー語の洗濯物みたいに見える文字)が、面白いのと同じように、きっとこの人たちには、日本語がとっても不思議に見えるのだろう。

授業は 11:30 ごろ、突然帰り始める子がいて自然な解散。先週から、一斉に公立学校で“単位試験”が行われているとのこと。いや、みんな試験の前にほんとにごめんなさい。(誰も気にしてないようだったが…)

家庭訪問をする

子どもの家に行きたい!という望みを、アヌ先生、ルザヤ先生と Mrs.パイがかなえて下さった。

「大勢で行くと警戒されるから」と、今日はまず、私と治子さんが、アンジェイの家に行くことに…。アヌ先生とルザヤ先生の先導のもと、交通量の多い広い道路を渡り(いつも生命がけ)、道沿いに並ぶスラムの一軒へ。1m もない隙間に体を押し込むと、すぐ左がアンジェイの家。6 畳一間くらいの広さの家に招きいられる。お父さんとお母さんがとても優しく歓迎して下さい感謝。むちゃくちゃなヒンディー語でおしゃべりして外に出たら、人だかりがしていた。教室の子ども姿も何人か見える。

この一面に住んでいる子が多いのだ。ぞろぞろみんながついてきて次の家へ。なんだか鶴瓶の「家族に乾杯*」のようだよ。<NHKの番組。毎週、いきなりお宅訪問をするアドリブ旅行が放映されている>

次のお家にはテレビとDVDが！…なのにその奥の家は、これが家と呼べるのか…。かろうじて、トタンの(穴だらけの)屋根があるだけのところに、若いお母さんと小さい小さい女の赤ちゃん。「教室に口のきけない男の子がいるでしょ？あの子の家よ」とアヌ先生。彼女は堂々としてどこでも歓迎されていた。外に出ると、人だかりに何やかや質問される。みんなとっても嬉しそう。会話の本を適当に開けて、「私は結婚しています」とヒンディー語で言うと大笑い。何で？ 治子さんを指さして、「結婚していません」と付け足すと、騒ぎが大きくなった。ああ、こんな人間がヒンディー語をしゃべるといふ事実そのものが、お猿が人間語をしゃべるくらい面白いことなのかも…。治子さん、明るいおばさんに、「次はボーイフレンドを連れていらっしやい」と言われていた。

ホテルへの帰り道、Mrs.パイに買い物の出来る場所を教えていただいて、いったん部屋で休んでから16:30に5人で町に出る。女子大生さんたちのお買い物は時間がかかる。そんなに値切っていたら、日本に帰ってからも値切り癖が抜けなくなるよ、と心配になる。

買い物からホテルまで、歩いて戻る途中、両足首から先のないレプラの物乞いが、汚い道路に転がり、のた打ち回って叫んでいた。目も見えないようだ。缶が彼の近くをコロコロ転がり音をたてていた。まだとても若い。ドキっとした。教室の子どもの家のこと、この若い患者のこと…。インドは厳しい。

9月11日(火)

BLPの設立記念日

起きた時から腰が痛い。にぶい痛み。今日は何もしたくない。…が、そういうわけにもいかない。9:30のお迎えから「インドタイム」になっており、10:20頃やっとBLPの車がホテルに。熱っぽくて喉も痛い。う〜、一日もつかない…。後ろの荷台にばかり乗っていたのも、腰痛の原因かも、と、治子さんと一番前の座席に座り、教室へ。

祥子さんと、さゆりさん、9日に買ったサリーを持参。アヌ先生、ルザヤ先生、フローラ先生、3人がかりで真剣に着せて下さる。女の子たちが、「髪もちゃんとしないと！」と言い、私のくしを器用に使って、祥子さんの髪をインド風にアレンジ。まあ可愛い！福井さん、祥子さん、さゆりさんが、家庭訪問に行っている間、子どもたちと、今日は思い切り遊ぶ。(かなり疲れて息絶え絶えになる)インドの子どもが、外でどんな遊び(ゲーム)をしているのか、よく分かった。とにかく動く動く。12:00過ぎ、「2月にまた来るからね」と、一人一人抱きしめて、子ども達とお別れ。毎回この瞬間泣きそうになってしまう。

Mrs.パイと昼食。昨日道で見たレプラの物乞いのことを話したら、「彼らは治療を勧めても来ないし、無理に連れてきても逃げ出してしまうのよ。今、目の前の1ルピー、2ルピーの“お恵み”の方が、自分の健康より大事なの。」それからMrs.パイは言われた。「お金をあげてはいけないのよ。彼らは気づかないといけない。教育がないということは、とっても不幸なことなの」『ああ、そうか・・・』ストンと腑に落ちた。「教育は、本当に大事なことなんですね。」ごく当たり前のことを、改めて教えられているような気がした。これはとっても辛い。“人ごと”や“風景”だったものが、現実としてリアルに迫ってきて、「お前はこれを自分自身の“現実”にできるのか？その気持ちでやれるのか？」と、指をつきつけられているようだ。やれるかどうか分からないけど、今やるべきだと思うことを、やります、としか言えないのだろう。

ガンジーマーケットで少し買い物したあと、BLPのオフィスへ。(ガンジーマーケット近くのマンション4階のオフィス)15:00からBLPの設立記念日を祝う小さな祝賀会。優秀ボランティアの表彰式(お金を渡す)が行われ、なぜか私が贈呈役に…。「お金をもらってすぐやめられたら困るので、半年後にしか換金できないようになっているのだ」という小切手。まじめくさった顔で、その小切手を受け取る人たちを見ながら、インド人って、ほんと面白い人たちだなあと思う。私もお礼のスピーチ。福井さんも女子大生も、一言ずつスピーチ。

18:40 頃 BLP のサテライトオフィスを出て空港へ。ものすごい車の量。
23:25、日本に向け飛行機に乗る。TG318 機はバンコクまで。TG620 機に
乗り換え、フィリピン・マニラ経由で関空へ。12 日（水）19:30 帰国。



次に会うまで
元気でね！



今回も、日本とインドのたくさんの
方々にお世話になりました。
ありがとうございました！